

農業と科学

1981
8

GHISSO-ASAHI FERTILIZER CO., LTD.

ガーベラの栽培と

ロングの肥効

長野県農業総合試験場
花き専門技術員

成 沢 久

最近の切花消費の特徴の第1は、いわゆる洋花需要の増加につきる。ガーベラもそのなかのひとつで、今後期待のもてる種類といえる。ここでは取あえず、経営的な特長と品種ならびに施肥について述べ参考に供したい。

経営特性

栄養繁殖系大輪ガーベラは花の色彩が豊富であり、水あげがよく花の日持ちが長い。切花時期や購入後の室内環境にもよるが一般に2.5週、夏の高温期でも1週間余を觀賞することができる。

花の先進国のオランダではバラ・キク・カーネーション・フリージアにつぐ主要品目の座をしめ、1979年の市場出荷は1億7千万本、78億7千万円の生産額を上げている。このようにガーベラが急増している背景を、経営面からみると、労賃が高いため、投下労力が少なくすむ作目選択へ移行しているからである。

長野の施設花きの10a当り所要労力は、カーネーション400~450人/年、バラ200~250人/年であるのに対し、ガーベラは100人/年内外ですむ。こうみるとガーベラは施設切花のなかでは、省力花きの代表的品目といえよう。主な作業は植付・薬剤散布・灌水・葉かき・収穫出荷などで、ネット張りの必要はないし、灌水は自動化によるため、労働内容も軽労である。とりわけ切花栽培では、適期収穫が強く要求され、収穫適期を失うと、商品性価値が皆無になるものが多い。花き市場が休みでない限り、自由な休みをとることが容易でない。

カーベラの場合は、同一は場だと夏が2~3日毎、他の季節は3~4日毎の収穫でもよく、しかも無加温栽培で6月から11月に、1部加温すると、3月から12月まで連続出荷が容易である。高冷地の作期は5月から11月を主体に進めているが、だんだん作期が拡大されている。

なお経営費のなかでは種苗費の占める割合が大きく、10a当り6,000~6,600株の導入苗を要し、120万円の種

苗費になるが、2年栽培だと60万円内外になる。収量は1年目が6万本、2年目になると9万本内外、単価は30円から80円ほどで取引されている。これから消費の大衆化をめざすには、40円程度で十分採算のあう生産性の向上が望まれる。

品種特性

主要品種の特性を知ろうとして、53年8品種を導入し長野普及所・松代農協の協力をえて調査を実施した。

試験方法は松代町清野、中沢忠実氏は場、沖積層砂壤土に4月定植、床幅110cm、条間50cm、株間20cmの2条植え15cmの揚床とした。(現行標準は床幅70cm、条間40cm、株間20cmの2条植)

花梗長はロメオ・クレメンティン・ペロニカの順に長

表1 生育調査(2年生)

項目 品種名	葉長cm		花梗長cm		花径cm		花卉数
	10月	12月	10月	12月	5月	10月	
ペロニカ	57.6	39	18	61.9	11.5	9.9	56
アレドソグ	52.0	37	16	50.7	9.4	8.0	55
コンスタンス	60.0	34	17	57.1	10.6	9.5	76
ナッソー	56.6	31	19	61.2	11.4	8.5	54
ロメオ	58.6	47	22	69.4	10.4	9.0	46
ビートリックス	48.0	59	22	46.0	9.4	8.4	64
アブルプロッサム	44.0	45	26	47.9	10.0	8.4	54
クレメンティン	52.0	48	19	66.7	9.9	9.0	54

く、ビートリックスとアブルプロッサムは短かいが、商品性に影響はない。

葉数の10月調査は葉かき直前、12月は葉かき後の枚数である。株当り収量はコンスタンス、クレメンティンの順に多く、いずれも夏秋の収量は低い。ロメオ、ビートリックスは夏の高温期に奇型花の発生が多くみられたが、ペロニカ、クレメンティンは代表的な安定品種と思われる。なお成績を示していないが、黄色系ではイエロー

<1981年8月号目次>

- § ガーベラの栽培とロングの肥効……………(1)
長野県農業総合試験場 成沢久
花き専門技術員
- § 海成砂質土のハウスマトと
コーティング肥料の肥効……………(3)
千葉県農業試験場 遠藤宗男
土壌肥料研究室
- § 野菜の品種登録とその概要について……………(5)
農林水産省農芸園芸局 西村昌巳
種苗課 審査官
- § 深むし茶の生産地菊川町(静岡)を訪ねて……………(7)
本誌編集部

表 2 収量調査 () 1年目の収量

月	品種	ペロニカ	アレドソーグ	コンスタンス	ナッソー	ロメオ	ビートリックス	アブルブロッサム	クレメンティン
3		2.4	1.5	3.0	1.2	1.6	1.5	1.5	1.5
4		4.0	2.5	5.1	2.0	2.8	2.5	2.5	2.5
5		6.3	3.4	6.7	3.8	4.2	3.2	4.4	3.7
6		2.1(0.7)	3.7(0.4)	4.5(0.3)	2.7(0.6)	2.6(0.4)	2.1(0.7)	2.4(0.2)	3.4(0.5)
7		1.4(2.5)	3.4(1.8)	2.8(2.0)	2.0(2.0)	1.5(2.0)	2.2(1.5)	2.7(1.6)	3.3(3.2)
8		1.9(1.7)	2.3(1.5)	2.3(1.8)	1.9(2.2)	0.9(1.8)	1.3(3.3)	1.6(2.1)	2.6(3.2)
9		0.7(0.5)	1.3(1.2)	1.7(1.0)	0.7(1.0)	0.7(1.1)	1.1(2.2)	1.1(1.5)	1.7(2.5)
10		0.8(1.0)	0.9(0.3)	1.0(1.0)	0.7(1.3)	1.0(1.2)	0.8(1.7)	1.0(1.3)	1.7(1.6)
11		0.5(0.5)	0.7(0.8)	0.9(0.4)	0.6(0.5)	0.5(0.6)	0.3(0.9)	0.5(0.6)	1.1(1.1)
12		0.1(1.6)	0.3(1.0)	0.1(0.5)	0.3(0.7)	0.2(0.7)	0.2(1.0)	0.2(0.7)	1.0(1.1)
株当り計		20.2(8.2)	20.0(7.0)	28.1(7.0)	15.9(8.3)	16.0(7.8)	15.2(11.3)	17.9(8.0)	22.5(13.2)

モアの生育開花が順調である。品種特性調査は引続き3年目を実施中で、経済的栽培が成立しようである。

肥 料

品種同様わが国ではカーベラの施肥に関するデータがない。そこで長野普及所白石技師(現農業技術課)がコーティング肥料ロング360の肥効と、窒素の適量を明らかにするため展示ほを設置した。そこで丑山専技らと協力し、一応の成果をみる事ができた。

試験場所は篠ノ井鈴木政太郎氏は場、沖積層・壤土転作田。供用品種はクレメンティン、試験区は1区25m²2区制とし、窒素20. 40. 60kgをロング360を全量元肥に施用、慣行区は磷硝安加里を施用した。

表 3 生育調査

区名	項目	6/3	7/1	8/4	9/1	10/1	11/11
1. N20 kg	葉数枚	5.8	10.4	16.6	20.2	19.4	25.9
	葉長cm	19.9	35.2	44.7	44.0	45.7	44.4
2. N40 kg	葉数	6.5	12.3	18.6	22.4	22.3	31.4
	葉長	19.6	36.4	45.5	46.0	47.2	45.5
3. N60 kg	葉数	6.3	10.6	17.7	19.7	18.6	25.5
	葉長	19.1	34.0	42.0	42.4	45.7	45.1
4. 慣行	葉数	6.4	9.1	16.3	17.9	21.5	24.2
	葉長	16.3	33.4	42.1	42.2	44.3	43.3

表 4 収量調査 25m² 当り本

区名	1 N20kg	2 N40kg	3 N60kg	4 慣行
A	726	940	913	663
B	773	912	927	789
平均	749	926	920	726

その結果、窒素20kgでは葉色がややあわく、草姿の活力に欠け、窒素60kgは出葉数がやや少ない傾向が見られた。1~3区の土壤中におけるPH・EC・T-Nの経時変化は比較的安定しており、ガーベラの元肥にコーティングロング360は有効なことが認められた。施用標準は窒素換算10a当り40~50kg内外でよさそうである。

図 1 pHの経時変化

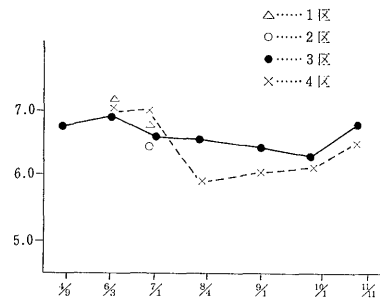


図 2 ECの経時変化

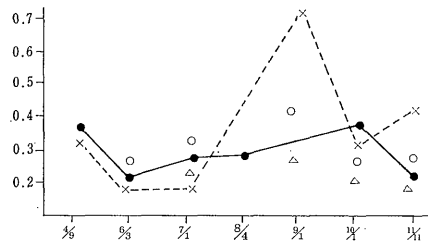
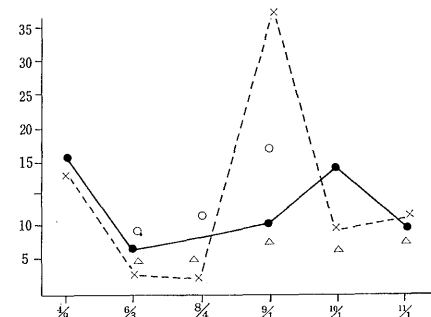


図 3 T-Nの経時変化



なお肥培のなかでは定植後の一斉活着対策、適量灌水、葉かきの随時例、オンシツコナジラミ、ネグサレ病、エキ病、灰色カビ病などの早期防除、室内の適温管理などを総合的にすすめ、生産の安定をはかりたい。

海成砂質土のハウストマトと

コーティング尿素(LPコート)の肥効

千葉県農業試験場
土壌肥料研究室

遠藤 宗男

1. はじめに

千葉県の施設野菜は、海洋性気候の九十九里および内湾の地域に多く、第1図のように冬期の最低気温が0℃以上と比較的めぐまれ、昭和30年頃から果菜類の栽培が行なわれてきた。この地域の栽培面積は、トマトで270ha およびキュウリで180ha に達し、その他の作目はメロン、ナス、ピーマンなどが栽培されている。

また、この地域の土壌は、海成砂質土でCECが8と低く、保水性が少ないため、肥料成分の保持力が弱く、多肥による塩類濃度障害が起こりやすい。

第1表 供試土壌の理化学性

粗砂	細砂	シルト	クレイ	PH		T-N	T-C	りん吸	CEC	有効態 P ₂ O ₅	置換性カチオン		
				K ₂ O	KCl						K	Ca	Mg
81.9	16.8	0.6	0.7	9.75	7.40	0.32	mg Trace	mg 260	me 7.32	mg 2.0	mg 54.0	mg 310	mg 310

現地におけるトマトの慣行施肥は、基肥は種粕を主体にし、緩効性肥料を併用し、追肥は液肥を4~5回施用する。砂質土壌のトマト栽培で肥切れが起った場合、急速にあらわれ第3花房以上の収量の減少が著しく、第1回目の追肥時期の判定が重要である。現地では、基肥の施用量を多くすることにより、追肥の開始時期を遅らせ、追肥の回数を減らす傾向があり、濃度障害のほか過繁茂となり収量の低下をきたしている。これらの追肥の煩雑さを解消する為コーティング尿素(LPコート)の全量基肥によるトマト栽培を検討した。

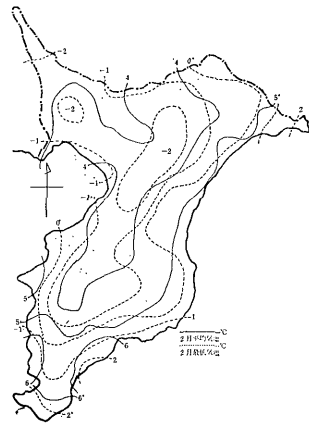
2. 各種コーティング肥料の、数品種のトマトに対する肥効

1) トマトのファーストに対するプラスティックコーティング尿素※(LPコート)の肥効

供試土壌は長生郡一宮海岸の砂土で、その理化学性は第1表に示した。試験は、この砂土を農業試験場のコンクリート枠に深さ1mまで客土したビニールハウス(220㎡)で実施した。試験区はLP140日タイプ区と慣行区で、施肥はLP140※、過磷酸石灰および硫酸加里をN、P₂O₅、K₂Oとして、それぞれ50kg/10aを全量基肥で施用し、追肥は行なわなかった。

対照の慣行区は、菜種粕、緩効性肥料および過磷酸石

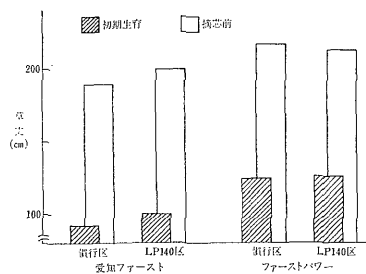
第1図 千葉県の冬期の気温分布



灰を基肥にN、P₂O₅、K₂Oとして、13.5、16.6、8.0kg/10aを施用した。石灰は貝殻が多いため無施用とし、堆肥は両試験区とも2t/10aを施用した。

追肥は千葉液肥2号(10-4-8)を10日間隔で、10月下

第2図 ファーストの草丈



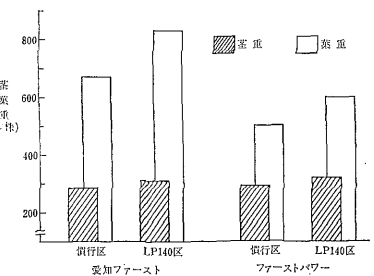
旬から1月下旬まで10回施用した。追肥量はN、P₂O₅、K₂Oとして、それぞれ20、8、16kg/10aである。

品種は55年度に愛知ファースト

ト、55年度にファーストパワーを供試し、作型は8月上旬は種、9月下旬定植の越冬栽培で、12月中旬から収穫を開始し、5月上旬まで調査した。

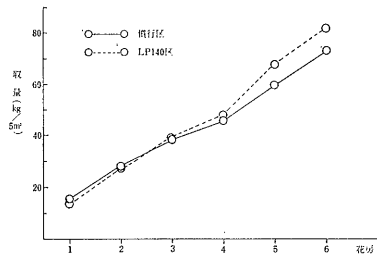
ファーストの生育を第2図に草丈について示した。愛知ファーストの草丈は、LP140区が初期および摘心時のいずれも慣行区より高

第3図 ファーストの茎葉重



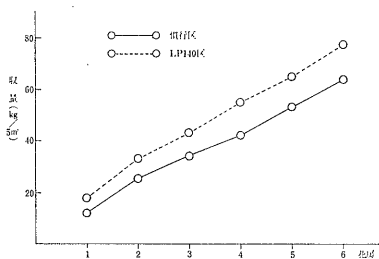
く、茎は太めに生育した。調査終了時の茎葉重を第3図に示した。愛知ファーストの葉重は、LP140区がやや重い程度であったが、茎重は顕著な差が認められ、LP140区が慣行区より明らかにまさった。ファーストパワーは、草丈では差が認められなかったが、茎重では明らかにLP140区が慣行区より重かった。

第4図 愛知ファーストの累計収量



愛知ファーストの花房別の累計収量を第4図に示した。収量は第1、第2花房で慣行区がわずかに多く、第5、第6花房になるとLP140

第5図 ファーストパワーの累計収量



区が多くなり、累計では8.5kgの差が認められた。ファーストパワーの花房別の累計収量を第5図に示した。収量は第1花房からLP140区が慣行区より多く、第4花房から第6花房までは差が増加して、累計では13.5kgの差が認められた。

跡地における無機態窒素の残存量は、慣行区が乾土100g当たり0.9mgに対して、LP140区は5mg認められた。また、ファーストパワー跡地に食用トウモロコシのハニーバンタムを無肥料では種し現在栽培中である。トウモロコシの生育は、LP140区が良好で、草丈が慣行区の約2倍に伸び、葉色が濃く、莢実の発生も良好であることが観察された。

以上のように、LP140は多量施用による濃度障害の発生が認められず、窒素の施用量が慣行区より多かったが、約7ヶ月間の越冬栽培を無追肥で遂行できた。収量的には、1株4kg以上の収穫があり、目標収量に充分達することができた。

2. TVR-2号に対するLP140の肥効

LP140の肥効をトマトのTVR-2号を供試して、促成栽培の生育収量で検討した。本試験が、1)の試験と異なる点は、1)は気温が低温に向う作型であるのに、高温に向う作型である。

試験規模、供試土壌と基肥の施用量は、いずれも1)の試験と同じである。

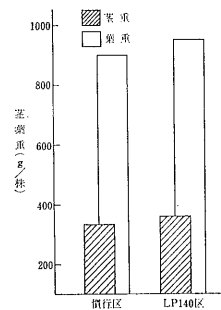
は種は11月上旬に行ない、施肥は12月下旬に実施し、定植は1月上旬に行なった。追肥は千葉葉肥2号を3月上旬から10日間隔で施用し、6回までは全区に、以後8回までは慣行区のみ施用した。

TVR-2号の調査終了時の茎葉重を第6図に示した。TVR-2号の茎葉重はLP140区がやや重い傾向であった。

TVR-2号の花房別の累計収量を第7図に示した。

収量は、第1花房で慣行区がLP140区より

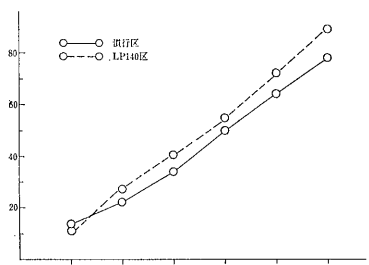
第6図 TVR-2の茎葉重



りもやや多かつ

第7図 TVR-2の花房別の累計収量

たが、第2花房から第6房花まではLP140区が多く、累計収量ではLP140区、慣行区の順であった。



3. ま と め

トマトの越冬栽培の場合、LP140は全量基肥で充分栽培が可能であり生育後期の肥効および跡地の残効が確認できた。しかし、第1、第2花房の収量がやや劣る傾向がある。促成栽培の場合は、初期収量がやや劣るほか、追肥の施用が必要ではないと思われる。

コーティング肥料の肥効が長い場合には、初期に肥料の溶出量は当然少なく、スターターとしての速効性肥料の併用は必要となる。また、栽培が高温に向う促成栽培では、生育も旺盛に向うため、溶出の速いコーティング肥料のブレンドが有効ではないと思われる。ハウス・トマトは約7ヶ月間の栽培を要する。その間、煩雑な追肥を必要としない肥料の出現が待たれるところである。

※ コーティング尿素 (LPコート) とは、尿素を樹脂で被覆することにより、その肥効をコントロールしたものである。

※※ LP140とは、畑状態25°Cで、140日かかって溶出するタイプを示す。他にLP40、50・70、100等がある。

野菜の品種登録と

その概要について

農林水産省農蚕園芸局
種 苗 課 審 査 官

西 村 昌 巳

1. はじめに

昭和53年の第84通常国会で成立した新しい種苗法は、同年12月に施行され2年半を経過したがこの間新品種保護制度の理解と普及が進むにつれ、出願・登録の件数も増加の一途を辿っている。また本制度については直接種苗とかかわりを持つ育種技術者、種苗業者のみならず生産農家、市場関係者から消費者に至る各層においても少なからず関心が示されつつあるところである。

この制度が生まれた背景となったものは、作物の新品種の育成が多面的に要望され、育種の振興が強く叫ばれていること。これは同時に育成者の権利を認め、新品種を保護するいわゆる育成者権の確立につながるものであること。また、海外諸国との交流が盛になるに伴ない我が国には新品種の保護制度がなかったため、外国から優良な品種の導入を阻害する要因となっていた反面、我が国で育成された品種が海外で保護を受けられない等の状況にあり種苗の国際交流の円滑化が求められていたこと。更に農業の基本資材である種苗の品質のより一層の向上と流通の近代化を図ること等が要請されていたことによるものである。

2. 品種登録制度の仕組み

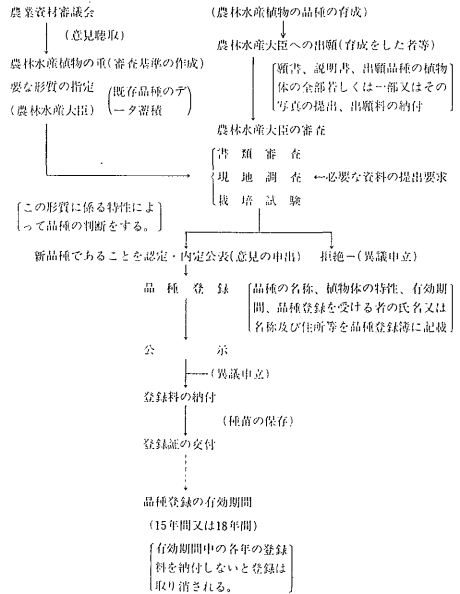
この制度では、新品種の育成者又は出願について同意を得た人は農林水産大臣に対して品種登録の出願をし、登録の要件（①品種の均一性、②品種の安定性、③他品種との区別性、④未譲渡性）を満たしていると認められた場合には所要の経路を経た後品種登録が行われる。この間出願資料に基づき書類審査、現地審査、栽培試験等による厳正な審査が行われる。現在、出願できる対象の作物は365種類となっている。

品種登録者にはその品種の種苗の販売に関する排他的権利が付与される。従って品種登録者以外の者は新品種の種苗を有償で譲渡したり、そのための生産をしたりする場合には品種登録者の許諾を受けなければならないこととなっている。

出願に際しては出願料（3万5千円）、登録された場合には必要な登録料を支払うこと、更に新品種を維持することが義務づけられる。

3. 野菜品種の出願・登録の状況

第1図 品種登録の手続図



制度の発足以来、今年6月末迄の出願及び登録の状況は表Iのとおりである。これを年次別にみると54年（初

表I 出願及び登録状況

区分 作物分野	出願品種数	登録品種数	取下げ 又は拒絶	審査中の 品種数
食用作物	34	5		29
工芸作物	6	2		4
野 菜	110 (64)	38	11	61
果 樹	145 (84)	52	2	91
飼料作物	8	4	1	3
花 類	158 (35)	26	6	126
観賞樹木	84 (34)	26	3	55
きのこ類	20	3		17
計	565(217)	156	23	386

(注) ()は農産種苗法に基づいて昭和53年12月28日前の出願で種苗法施行時において審査中のものであり内数である

年度) 85件, 55年 139件, 56年6月末現在 124件で、年次大幅に増加している。

とくに野菜についてみると、出願件数 110 件で全体の 19.5%、登録件数 38 件で 24.3% に当り、花き類、果樹とともに、園芸作物の分野での育種が盛んなことを示している。

これを野菜の種類別にみると、表IIに示すとおり、だいこん、いちご、えんどう、きゅうり等の順で 28 の品目に亘っている。

さらに登録者の階層別内訳は表IIIのとおりで、野菜の

表II 出願及び登録の状況

株式会社 みかど育種農場

種 類	だ い え き す メ キ ご と う ト は え に いん し に ね か か い ち ん ど う り か ベ ツ ぼ が マ く だ ん げ ん よん こ ん ご う かん ツ う し ト い ま ん じ む う に ご う かん ツ う し ト い ま ん じ む う に
出 願 件 数	13 9 9 7 6 6 5 5 5 5 5 4 4 3 3 3 3 2 2
登 録 件 数	7 1 4 3 4 4 - 4 - 1 3 1 - 1 - - - 1
内定公表中の品種	1 1 1 2 2

種 類	パ ブロ ック セ リー	し ゅん ぎ く	そ ら け め	つ る れ い し	な は す	や ま の い も	累 計	総 計
出 願 件 数	2 2 1 1 1 1 1 1 1						110	565
登 録 件 数	2 - - - 1 - - - 1						38	156
内定公表中の品種	1			1			9	38

- (注) 1. 出願件数および登録件数は56年6月末現在
 2. 出願件数は種苗法施行時の旧農産種苗に基づく出願を含む
 3. 内容公表は56年7月28日公表のもの

- 千葉県千葉市星久喜町1,203
 6. 育成者の氏名 中村 浄
 1. 登録番号及び登録年月日
 第74号(野菜第21号)昭和56年2月4日
 2. 農林水産植物の種類及び登録品種の名称
 ごぼう コバルト極早生
 3. 登録品種の植物体の特性の概要
 この品種は、昭和44年4月に農業技術研究所放射線育種場において、「柳川中生」種子に照射を受け、そこに出現した変異個体から育成した

表III 品種登録者の内訳 56.6.30 現在

部門では民間種苗会社の育成によるものが主体となっており、いわゆる篤農家の育成にかかるものがこれに次いでいる。国、都道府県の職務育成品種についても登録の対象となっているため今後の増加が見込まれる。

以上から考察すると野菜についていえば、生産者及び市場等の要望が強く、かつ将来普及が期待されるような種類、又いちご、えんどうのように簡単に再生産が行われ易いもの等を集る傾向にあるのではないと思われる。

4. 野菜の登録品種について

前述のとおり種苗法に基づく登録品種は現在38種を数えるが、このうち特徴のある品種の1,2を以下抜粋して紹介する。

- 登録番号及び登録年月日
第1号(野菜第1号)昭和54年11月1日
- 農林水産植物の種類及び登録品種の名称
はくさい 北京
- 登録品種の植物体の特性の概要

草姿は「紹菜」に似た立性で、葉は濃緑～極濃緑色、葉形は長く葉先はやや尖る。葉縁の切れ込みは浅く、葉面の波うちは少い。中肋は「紹菜」に似て長く細い。結球は草形の半結球で、球径約12～13cm、球高約45～48cmの細長い円筒形である。球重は3kg内外で「紹菜」と同程度の大きさである。結球葉数は少いが球のしまりは良い。内葉は濃い黄白色で、肉質ははくさいとしては硬いが、「紹菜」に比べると歯切れがよく軟い。熟期はやや晩生である。

- 品種登録の有効期間 15年
- 品種登録者の氏名又は名称及び住所

作物分野	品種登録者						
	総数	個人	種苗会社	食品会社等	農協	都道府県	国立試験場
食用作物	5件	0件	0件	0件	0件	4件	1件
工業作物	2	1	0	1	0	0	0
野菜	38	10	25	1	1	1	0
果樹	52	35	1	2	8	6	0
飼料作物	4	0	0	0	1	0	3
花類	26	16	7	0	0	3	0
観賞樹木	26	19	7	0	0	0	0
きのこ類	3	0	3	0	0	0	0
計	156	81	43	4	10	14	4

ものであり、根長が短かく、尻部肉付き良く、ス入りの少ない極早生種である。草姿は立性で、草勢強く、葉は丸葉で葉柄は「岐阜早生島」に比べて長く太い。生育日数は約100日で、根長は約50cm前後、「岐阜早生島」より短く、太さは約2cm位となる。

根部は淡かっ色で滑らかであり、ス入り・空洞がなく、「岐阜早生島」より首部から尻部までの肉付きが良い。耕土の浅いところでも栽培が可能である。

- 品種登録の有効期間 15年
- 品種登録者の名称及び住所
株式会社柳川採種研究会
茨城県東茨城郡美野里町羽鳥 256 番地
- 登録品種の育成をした者の氏名 柳澤康雄

深むし茶の生産地

菊川町(静岡)を訪ねて

本誌編集部

静岡県といえば富士山とお茶が連想されるように、お茶の生産地として有名ですが、菊川町はその中で深むし茶の名産地として著名で、品評会でも多くの賞を獲得されています。その菊川農協に茶業指導課長坂部静雄さんを訪ね、深むし茶について種々お話をうかがった。

「菊川町の農業概要」

菊川町は静岡市、浜松市の間位置し、日本一の大茶園地帯牧之原台地を擁する菊川河畔にあり、人口約26,000人の静かな町である。

農家人口は約12,000人で、農業生産額の概要は表1のようである。圧倒的にお茶が主体で、いかにお茶に力を入れているかがわかる。茶の生産推移の概要は表2に示したとおり、菊川のお茶は、その品質の良さから着実に面積を拡大しつつある。



坂部静雄さん

1. 農業生産額

農業粗生産額 (百万円)

総 額	8,753	(53年)
① 茶	5,208	〃
② 畜産	1,373	〃
③ 米	1,178	〃

2. 生葉・荒茶生産量粗生産額

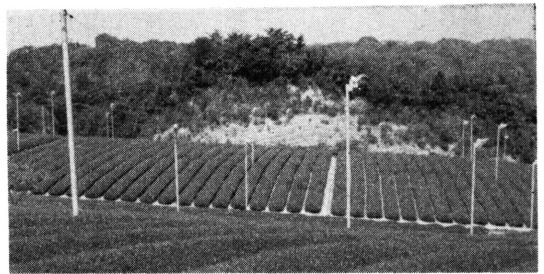
年度	生 葉			荒 茶			茶粗生産額計	農 業 粗 生産 額	右に示れる茶粗生産額の割合
	栽培面積	生産量	10a当り収量	粗生産額	生産量	粗生産額			
40	882ha	10,907t	1,237kg	538百万円	2,590t	274百万円	812百万円	1,830百万円	44%
45	973	12,331	1,363	1,530	2,934	584	2,114	3,866	55
50	1,150	14,255	1,341	2,938	3,291	1,169	4,107	7,440	55
53	1,230	15,310	1,320	3,810	3,419	1,399	5,209	8,753	60

「深むし茶について」

「ふかむし茶というのはどんなお茶なのですか」とお聞きしたところ、「蒸気で蒸す時間を長くしたもので1分～1分半位蒸します」とのこと。この蒸す時間が重要で、従来の浅むしでは得られない風味が出るそうで、「深むしすると、茶葉の樹脂質が破壊されて砕け茶や粉になりやすいが、その分、渋みがとれて、甘味こくが増えます」とのことであった。

「菊川のお茶は、その昔、葉肉が厚いので中級品とし

菊川の茶園 (霜害ファンが設置してある)



て扱われていた」という。当時の製茶技術では葉が厚い菊川の茶を味のよい茶には仕立てられなかったらしい。篤農家の皆さんがもっとうまいお茶をと研究されたとのことで、一言で言えば、茶葉の物性に着目した品質改良の成功例ということになるだろうが、現在の名声を確保するまでに20年も必要としたと聞けば、良質な葉の生産一蒸し一製茶に到るまで、数多くのノウハウの蓄積を必要としたことが考えられ、まさに菊川の深むし茶は技術のかたまりと思われた。

菊川町の茶業の繁栄は、「深むし」技術の開発と共に、茶業の発展は栽培から製造まで一貫して省力化された近代的な協業化茶工場の設立が重要であるとの結論を着実に実現してきたことにある」と坂部さんは指摘されている。製茶の協業化工場で町内で収穫された生葉の大部分が荒茶に生産され、中央の菊川農協で再製から冷蔵保管までを受けもち、今では1,300トンもの冷蔵保管能力を保有して、お茶の需給調整に大きな役割を果たすようになってきているとのこと。お茶の品質向上への努力と共に、製茶のコストダウンを追求されてきた所に、現在の菊川のお茶の名声と繁栄があるとの感を強く持った。

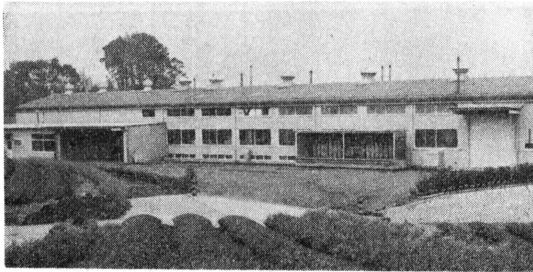
茶業指導課は製茶工場の経営についての相談指導から、茶園造成、良茶生産のための施肥の指導と多彩な活

動を展開されている。いわば技術センターとしての機能が最大限発揮されている。

菊川町では盛んに茶園が造成されている。現在では1,300haを超えていることから、茶に対する農家の期待がいかに大きいか判る。

「その中で一番重要なことは良質な茶葉を生産できるような土づくりである」と、坂部さんは指摘される。「深むしとして味のすぐれたお茶作りをすすめて、ゆるぎない地位を保つには均一な良質葉生産が大切である。そのために土壌調査、土づくりに力を入れており、特に土づくりには、有機質を投入して土壌を肥沃にし、良質

製茶工場の遠景



の茶生産につないでいる」菊川町周辺は頁岩土が多く、開植のためには、有機質による土質改善が重要なのである。最近菊川町も兼業化が進行しており、土壌調査による適切な施肥指導には非常に気をくばっておられるようであった。

茶業指導課では農家の皆さんに茶園管理の要点を理解していただくために、やさしくかみくだいた「茶園管理の要点」というパンフレットを作製されている。農家と密着した茶業指導課の運営は本当に素晴らしいと思う。

さて、深むし茶は菊川のお茶の葉肉が厚いことを利用して作られる。栽培のポイントはいかにして良質の葉肉の厚い葉をとるかにある。そのためには、茶樹に力をつける必要がある。上記のパンフレットにも、秋に健全な茶樹が一番茶の生産にいかにか大切であるかが示されており(図1)、この点に施肥の重点がおかれている。

すなわち、有機質で地力の維持をはかりつつ無機肥料で茶樹の生育樹盛を確得し、次年度の多収を意図した施肥設計が立てられている(多収2号)

摘採は茶樹にとっては大きな痛手で、そのショックから早く回復させることが大切である。一番茶刈取り後樹盛を回復させるには、吸収のよい、早効きのくみあい燐硝安加里(ふかみどりとNK201)を使っているとのことで、アンモニア態チッソと硝酸態チッソをバランスよく含む化成肥料で、効果を十分引き出されていると感じた。

更に特筆すべきことは、省力緑4号と名付けた省力、省肥栽培を意図した施肥設計が組まれていることである。「お茶の施肥のコツはいかに、チッソ、リン酸、カリを持続して吸収させるかにあり、それが省力省肥につながる」と坂部さんは考えておられる。すなわち、本施

肥設計では、年4回施肥でかつ、持続して肥効成分を供給すべく設計されたものである。この施肥設計に採用されている「ロング肥料」とは、弊社が販売している「くみあい被覆燐硝安加里ロング」のことである。

この肥料は100~360日も肥効が持続する新しい肥料で、各作物に使用して頂いているが、お茶でもすぐれた効果を示すものと、来年のお茶摘みが待ち遠しい。

「菊川のお茶にとって最大の問題は何でしょうか」と質問した所、坂部さんは「霜害の克服」と答えられた。54年の霜害のひどさは記憶に新しい。「何年かに1度しか来ない霜害に対処することは、経済効果の点で難しい問題であるが、すでに防霜ファン設置面積が菊川農協の栽培面積の20%に達した」とのことである。

深むしの製法を生み、今、新しい省力施肥体系にチャレンジし、また、自然を克服しようと努力されているお話を聞いて、菊川のお茶はもっともっと発展すると確信しつつ、記者は菊川農協を辞去した。

図1 茶の秋芽と一番茶の生育

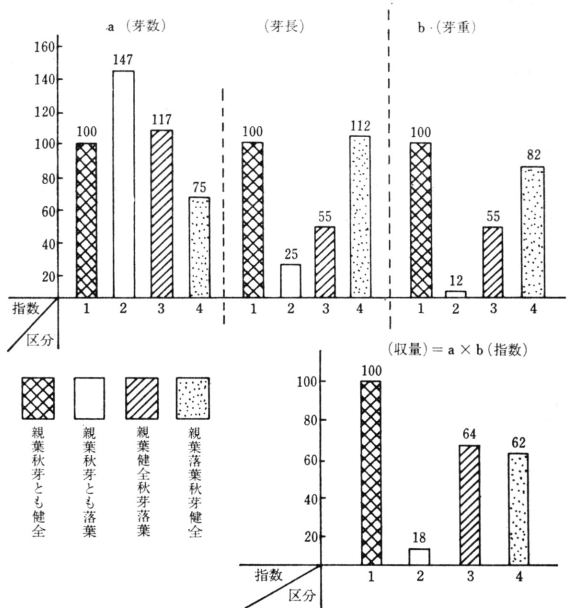


表3 菊川農協の代表的施肥設計

種 別	成 分			秋 肥 (1)	秋 肥 (2)	春 肥 (1)	春 肥 (2)	芽 出 し	一 茶 時	一 茶 後	二 茶 直 前	二 茶 直 後	三 茶 直 後
	N	P	K	8 月	9 月	3 月上旬	3 月下旬 4 月上旬	4 月中下旬	5 月上旬	5 月下旬	6 月上旬	7 月上旬	8 月上旬
多収2号	124.0	40.8	65.2	菊川有機 (8袋)	有機化成 S280(5袋)	菊川有機 (8袋)*	土の素有機 (5袋)	硫 安 (4袋)	ふかみどり (4袋)	NK201 (3袋)	硫 安 (4袋)	か お り (4袋)	アズミン苦土 (5袋)
省力緑4号	87.8	48.6	50.6	菊川有機・ロング肥料 (8袋) (12袋)		菊川有機・ロング肥料 (8袋) (10袋)		硫 安 (4袋)		緑 風 (4袋)			